

# 感染対策が 歯科医院経営の武器となる！②

RKIガイドラインに基づいた  
インфекションコントロールに取り組んで

山口県 ふじもと歯科クリニック  
院長  
藤本晋治



ジーシー・サークル185号 13～18ページ「感染対策が歯科医院の武器となる！① 歯科衛生士を確保するための奥の手」(中村健太郎先生)の続編となりますので、ぜひそちらもご覧ください。

## はじめに:感染対策に取り組んで

当院は15年前に開業し、開業以来ずっと清潔環境整備に力を注いできた。その頃はスタンダードプリコーションが主流とされてきたが、厚生労働省からの明確な基準はなく、各医院における管理者の倫理観に委ねられているのが現状であった。それでも、私はデンタルスタッフと常に相談しながら安心安全な診療環境づくりに取り組んできた。しかし、その策定の糸口すら見つからずに先行き不安を感じていた。

RKIガイドラインの根幹には「スタッフと患者さんを守る」という考え方があり、このガイドラインを提唱している中村健太郎先生から「あなたの職場環境ではスタッフを守ることはできない」と言われたときの衝撃ははっきり覚えている。

RKIガイドラインを実践すればスタッフに明確な指針を示せると考え、早速当院に取り入れるべく準備を始めることとした。必要な消毒スペースの確保、動線分離など、具体的に調べれば調べるほど、旧医院では手狭でありRKIガイドラインを実践することは到底できないという結論に至った。

ルールが明確である以上、中途半端なことはしたくなかった。RKIガイドラインを確実に実践するためには、歯科医院を移転するか、または大がかりなフルリノベーションが必要不可欠であると考へた。熟慮した結果、移転を決意し、歯科衛生士や滅菌に関わるスタッフも賛同してくれ、全面的に協力してくれることとなった。例えば、印象体や補綴装置に対する消毒の実施など、旧医院で

は見過ごしていた課題の一つひとつスタッフ主導で克服していった(図1)。

提案してくれる歯科衛生士やデンタルスタッフにはこれからも長く関わってほしい。また、思い入れをもって働いているスタッフを安心安全な職場環境で守りたい。そんな思いを持った私にとって、移転は感染対策を介してスタッフとどう向き合っていくべきかを再確認する、良い機会となった。移転してからは歯科衛生士も受付スタッフも自信を持って患者さんに説明するようになり、その姿を見ると院長として本当に良かったと思っている。

そこで、今回はRKIガイドラインに基づいたインフェクションコントロールの取り組みが歯科医院にどのような好影響をもたらしたかを紹介してみたい。



図1 印象や義歯用模型などは、技工室の入口手前に置いてある印象体の洗浄システムにてグルタラール洗浄を行った後に、技工室に運ぶようにしている。右写真が院内のレイアウトで、写真の手前側が診療室、奥側が技工室となっている。

## RKIガイドラインに基づいた医院の取り組み

**当院の紹介** (医院内部はジーシー・サークル185号 15ページを参照)

### 1. 医院環境

人口が約57,000人の山口県下松市の、決して交通の便が良いとは言えない地域で開業している。医院周囲は成熟した街並みで、住民の多くは年金生活者である。ただし、県内唯一の人口増加の市であり、そのなかでも

若いご家族が転居してきはじめています。15年前の開業当初より、近隣のみでなく、市内全域、周辺の市も含め、小児から若い世代を中心とした幅広い患者さんを集患するために予防を主体とした歯科診療を心がけている。

### 2. スタッフ構成

歯科医師は常勤2名、歯科衛生士は常勤6名(1名育休中)と非常勤2名、受付と滅菌担当者4名の計14名である。この4月からは学生アルバイト1名が歯科衛生士として就職し、育休中だった滅菌担当者1名が復職した。



ふじもと歯科クリニックのスタッフ。

## RKIガイドラインに対する理解と実践

旧医院ではホルマリンガス殺菌器も使用していたのだが、何度も「目が痛い」とデンタルスタッフから訴えがあった。そのたびに修理を依頼するが、毎回「異常なし」の回答であった。スタッフの健康被害だけは絶対に避けたいのだが、このまま使用するほかないと考えたときもあった。

それでも、他に何か良い方法はないのかと何度も感染対策セミナーに足を運び、ようやく辿り着いたのがRKIガ

イドラインであった。その結果、ガス殺菌器は破棄し、今ではスタッフの健康被害を解消することができて良かったと感じている。

正しい感染対策を実践するうえで、しっかりとしたルールがあると医院全員で同じ方向を向くことができる。RKIガイドラインには明確なルールがあり、正しくインフェクションコントロールが運用できると判断した。そこで、全員で同じ研修会に出席し、同じ方向

を向き、情報共有すべき基準を設けることとした(図2、3)。

新医院では、作業者はルールに従って運用することによって、器材の置き場所ひとつとっても全員が認知するようになった。そのため、常に見た目もすっきりし、モノが増えて散らかる心配もない。このようにみんなでルールを作り、それを真面目に実践していくことが大切だと強く感じている。全体の意思統一で大切なのは「明確なルール



図2 RKIガイドラインの基準は明確なのでいつも同じ目標をもって歩むことができる。院長も感染対策に積極的に取り組んでいる。



図3 歯科医師、歯科衛生士、受付、滅菌担当者などのスタッフが集まり、感染対策に関する院内勉強会も定期的で開催している。



を作り、職員全体がそれを理解し、切り切る」ことなのである。この理解ができてからこそ、ミスが生じても共有認識としてすり合わせることができると思っている。わかりにくいことや何度も聞くことに気がひけることに関しても、歯科用アプリ「soeasy buddy for dental」の中に撮りためた動画を見直すことで正しい運用を理解でき、先輩の手を煩わすことなく院内のルールや共通認識を理解することができている(図4)。そのため、先輩職員も緊張感を持って業務にあたるとともに、いつも清潔を保ち、誇りを持って仕事

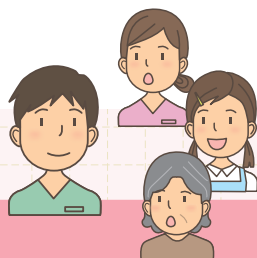
できていると強く感じる。

RKIガイドラインの情報が得られる「歯科医院のための感染対策<sup>1)</sup>」を全員が持ち、手探りの中、著者への確認や検証をしながら構築した。現在は「歯科医院のための感染対策マニュアル<sup>2)</sup>」という具体的で理解しやすい実践編を活用しており、今後さらに共通認識は強化されると思う。新しい器具や機器が導入された時も、どのように運用すれば良いかを

ガイドラインに沿って判断できるのである。責任ある行動をとってくれるデンタルスタッフが常駐していることは本当にありがたいと思っている。



図4 いつ、誰が行っても同じことができるように、動画を利用した正しい情報共有を頻繁に行っている。



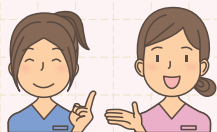
## 移転後における手応え

積極的に勉強したい歯科衛生士や医院の戦力になってくれる仕事熱心な歯科衛生士を採用したい。ただし、採用する側も、何か歯科衛生士に届く形で診療スタイルに関する情報発信をしたり、何かの活動を通じてアピールしないと求職している歯科衛生士には届

かない。求人先の情報が得られないままでは、就職先の選別に慎重になるのは当たり前である。

そこで今回のように、診療スタイルに関するメッセージよりも、歯科衛生士学校でも習ってきた感染対策、とくに徹底した感染対策の充実度をアピ

ールしたほうが求職する歯科衛生士に届くのではないかと思索した。RKIガイドラインに基づいたインフェクションコントロールが、歯科衛生士の安定獲得と継続勤務、また患者さんの満足度にどのような手応えがあったかを述べてみたい。



## ① デンタルスタッフの意識改革

移転の際は医院の設計や清潔環境に対するルール作りをスタッフが中心になって考え、RKIガイドラインに基づいたルール作りやRKIガイドラインの理解、実践に至るまで、チーフ歯科衛生士とディコンタミネーションスタッフリーダーを中心に全員で構築してくれた。

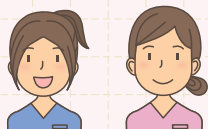
また、RKIガイドラインに関するセミナーも全員で受講したことで、目的をしっかりと理解できているため仕事が自信に満ちたものになっている(図5)。当然、

この分野においてスタッフの評価は高く、「是非この医院に貢献したい」「この医院でないと働けない」と嬉しいことを言ってくれるスタッフもいる。私自身、その評価を裏切らないようきちんとした治療を行うとともに、新しい情報は積極的に収集し、患者さんに貢献できる喜びをともに感じ、彼

女たちの高い意識に応えていきたいと感じている。



図5 一部のスタッフだけが関わるのではなく、スタッフ全員で取り組むことで、日々の業務を自信を持って行える。



## ② デンタルスタッフの協力体制

昨今の労務は厳正であり、有給休暇や本人や家族の急な体調不良などで滅菌担当者が不足することも想定される。そのため、歯科衛生士全員がステリライゼーションルームの業務を兼任できる体制を組んだところ、結果的にデンタルスタッフ全員の滅菌業務への理解、共通認識は深まってきた。

歯科医院のなかには、歯科衛生士は予防患者さんの管理や歯周初期治療に特化するべきとしている医院もある

と聞いている。私は、専門知識を持ち合わせた歯科衛生士がステリライゼーションルームのリーダーであるべきだと考えており、汚染器材の再生処理にも積極的に携わることでエビデンスに基づいた業務ができると想っている(図6)。この大切さをわかってくれる歯科衛生士が増えてくると、歯科院内は自然と一丸となってくる。

また歯科衛生士からは、患者さんが健康になっていくのは「歯科衛生士冥

利」に尽きるとの声も聞いており、私も嬉しく思っている。しかし、予防管理する患者さんが増加すると、患者さんとの会話の中で治療の手を止める必要もあり、1人に対する治療時間も確保するうえで、PMTC専用歯科用ユニット数に見合うだけの歯科衛生士が必要となる。歯科衛生士の安定した確保が、歯科医院経営の鍵となることは間違いない。

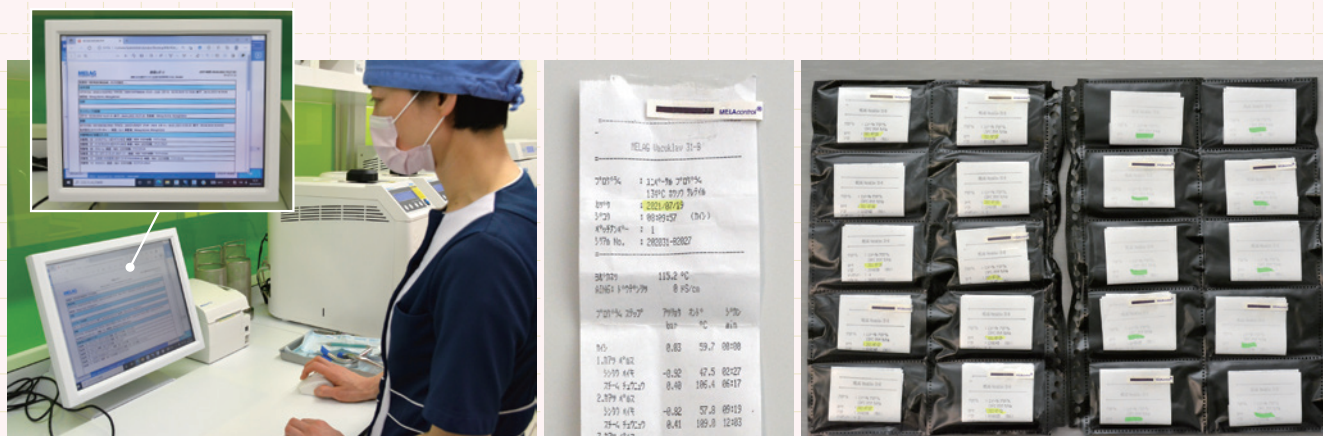


図6 きちんと滅菌ができるか滅菌処理の前に機器の状態を確認し、テストの結果をすべて記録、管理している。



## ③ 歯科衛生士の雇用

当院周辺でも働きたい人の確保は難しく、ウィズコロナ時代に医療に携わるデンタルスタッフ、とくに歯科衛生士の確保はきわめて難しい。協力して働くのはスタッフ同士であり、スタッフ間のつながりがチームワークに大きく影響を与える。そこで、面接前には診療中の院内見学によって、汚染器材の再生処理や診療中の業務内容を確認してもらい、自分には無理だと判断すれば辞退してもらうようになっている。当院の感染対策の実際を見て、ぜひ一緒に働いてみたいと意欲のある方を、一緒に働けそうかデンタルスタッフの意見も聞きながら採用するようして

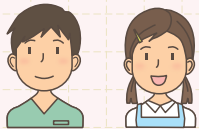
いる。結婚や引っ越しなどライフイベントで退職するスタッフはいるが、移転してからは育休→復帰という道筋が整ってきている。それは、やりがいに加え、清潔を目指す歯科医院に戻りたいと思える労働環境づくりがポイントなのだと思う。

実際、歯科衛生士からの売り込みの電話やメールを受けることがよくある。患者さん向けに作成したホームページの動画をチェックしているようで、いつか当院で働きたいと思っている歯科衛生士、当院のことが気になっている歯科衛生士が多いことも把握している。

また、歯科衛生士が患者さんとしても来院するが、当院への期待を感じながら治療していることも少なくない。

求人倍率20倍以上とも言われている歯科衛生士市場において、歯科医院の清潔を追求する噂が流れることは、採用において有利に展開することができると感じている。求職者が現れたら、まずは自分たちの基準に合う方かどうかを確認することは、その後の医院運営において非常に重要なことだと考えている。採用したデンタルスタッフは皆勉強熱心で、その勉強したことを医院に生かしてくれようとするありがたい存在と言える。





#### 4 実習生の評判

歯科衛生士学校からの実習生を年間に10人以上受け入れている。そんな彼女たちに教えることは、手指衛生とくにアシストワーク時にその場を離れる時は必ずグローブを外して手指消毒するということである。汚染されたグローブを着用したまま診療室をウロウロすることはリスクでしかないことな

ど、患者さんも安心する感染対策を学生の時から教えることにしている。実習後に行った学校のアンケートでは、衛生環境における項目において常に良い評価をいただいている(図7)。誰が見ても気持ちの良い環境を作ることには必ず良い結果につながるのである。各トリートメントルームには手洗い

場を設け、手をかざせば自動的に抗菌石けんや擦式アルコール製剤が流れ出る装置を設置している(図8)。学校で感染対策を習っている以上、私たちは学校教育以下の実習環境ではいけない。それよりも期待を上回る最高の環境を提供し、実践を通して正しく学習してほしいと願っている。

実習先の感染予防対策に対する実習生の感想

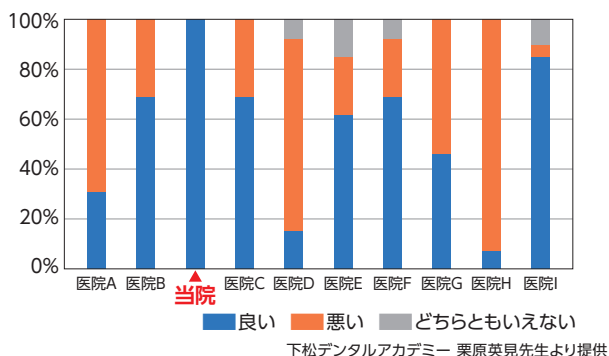
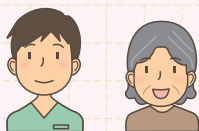


図7 臨地実習終了時に実習生に対して無記名で行われた、実習先に関する「院内の感染予防対策はどうでしたか? (良い、悪い、どちらともいえない、で回答)」というアンケートの結果。当院のみ「良い」が100%だった。



図8 各ユニットで確実に手指消毒を行うことのできる環境づくりが大切である。



#### 5 患者さんの評判

歯科用ユニット数を増設したことで増患しているが、なかでも新規と再初診が増患した。ステリライゼーションルームのインパクト、そして感染対策業務を患者さんに伝えることで感心したり安心したりしてくれたと思われる。新規の患者さんの口コミが、さらなる患者さんの増加につながり、また私たちの頑張りにもつながっている。

清潔でないことを理由に転院してくる患者さんも多く、清潔不潔は歯科医院の選別にとって重要なポイントであることに気づかされた。「本当にきれい

りを知ると、他の医院に行く気が起こらない。これからもよろしく願います」との喜びの声をよく耳にする。本当に嬉しい瞬間であるとともに、身の引き締まる瞬間でもある。

RKIガイドラインに準拠したインフェクションコントロールが正しいと信じ、日常業務のレベルが上がっているのが、簡単な説明で当院のこだわりが患者さんに伝わる。患者さんとの信頼はデンタルスタッフが直接

患者さんとの会話の中で得られているように思われる(図9)。患者さんの質問に迷うことなく回答でき、その場面に応じた判断を自分たちができるからであろう。



図9 スタッフと患者さんの日頃のやり取りから、スタッフが信頼を得て、それが医院の信頼へとつながっている。

## おわりに: RKIガイドラインに基づいたインフェクションコントロールに取り組んで

これまではRKIガイドラインに沿ったルールを遵守しているため、躊躇せず汚染器材の再生処理が実行できていると自負している。

チーフ歯科衛生士は地域の歯科衛生士とともに勉強会を立ち上げ、インフェクションコントロール、臨床技術、保健指導、栄養管理まで多岐にわたる情報共有をしている。他のスタッフも当院での取り組みについて地域の歯科衛生士

と共有している。デンタルスタッフみずからがアウトプットとインプットを繰り返すことで、地域での歯科衛生士の資質向上に貢献したいと思うようになった。

移転による建築費や設備費に大幅に出費し、また毎日のランニングコストも費やすものの、これまで歯科医院全体でみた限りでは、RKIガイドラインに基づくインフェクションコントロールを実践していることは、すべてが「プラ

ス]でしかない(図10)。

すべてのデンタルスタッフも積極的に医院に関わってくれるありがたい存在に育ち、患者さんからも多くの感謝の声をいただいている(図11)。集患などしなくとも、新規患者さんは予約日を待ってでも来院してくれるという良い循環が生まれている。正攻法の清潔環境の追求こそが良い循環を生み出していると言える。



図10 RKIガイドラインに基づく院内感染対策を実践したことで、スタッフみずからが院外での活動も行うようになっている。



図11 デンタルスタッフが担当、対応した患者さんから感謝されることが、デンタルスタッフの高いモチベーション維持にもつながっている。

私は「感染対策は経費ではなく、投資なのだ。感染対策は安定した歯科衛生士の雇用につながり、感染対策は患者さんの安全安心につながるのだ」と確信している。

歯科医師である院長の行動でデン

タルスタッフは変わってくれる。歯科医師こそがインフェクションコントロールを一番理解すべきであり、そこには高い倫理観を要すると言える。

最後に、従業員に誕生日プレゼントを贈る院長も多いと思う。本当のプレゼン

トは安心安全な労働環境であり、感染対策こそが院長が贈る最高のギフトであり、院長からの愛情表現と言えよう。

なお、今回はデンタルエアロゾルへの対処法をご紹介しますので、ご期待ください。

### ●参考文献

1. 中村健太郎, 山本司将, 伊藤磨樹, 山本美由紀. 歯科医院のための感染対策 ヨーロッパ基準のインフェクションコントロール. クインテッセンス出版; 2018.
2. 中村健太郎, 伊藤磨樹, 伊藤彰. 歯科医院のための感染対策マニュアル RKIガイドラインに基づいたルーティンワーク. クインテッセンス出版; 2022.



藤本晋治 (ふじもと しんじ)

山口県 ふじもと歯科クリニック 院長

略歴・所属団体◎2003年 岡山大学歯学部卒業。2008年 山口県下松市 ふじもと歯科クリニック 開業。2020年 感染制御を目的として80m先に移転開業  
日本歯周病学会/日本補綴歯科学会